

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代日本語の待遇表現についての研究：『テラスハウス』に見られるアップシフトを中心として
Author(s)	レーサンクラン, キッティポン
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 35期 : 20 - 32
Issue Date	2020-10-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050140
Right	
Relation	



現代日本語の待遇表現についての研究

— 『テラスハウス』に見られるアップシフトを中心として —

レーサンクラン・キッティポン

1. はじめに

日本語の会話で、初対面の人や目上の人と話す場合はデス・マス体、家族や友人と話す場合は普通体で話すと、日本語教育の現場では教えられている。しかし、実際には、同一の相手と話している場合に、デス・マス体と普通体が混用されることも多い。例えば次のような場合である。

【会話例 1】 (参加者: M1、M3、F1)

725	F1 (28) : 「FUDGE」って雑誌わかりますか？	※	ダウンシフト ダウンシフト
726	メンズもあるかな？		
727	M1 (26) : 「men' s FUDGE」ってあったよね。		
728	F1 (28) : そう。		
729	[その…、メンズと		
730	M1 (26) : [「何 FUDGE」って。hhh		
731	M3 (20) : これっすか。		
732	F1 (28) : そう。		
733	M3 (20) : <F1 の携帯電話を取り落として> あ、ごめんなさい。	→F1	
734	F1 (28) : 全然です。	→M3	アップシフト

※空欄はその場にいる参加者全員に発せられた発話を示す。以下同様。

日本語のスピーチレベルに関する先行研究は数多くあるが、分析されたデータは被験者の談話を録音したものや、テレビのインタビュー番組などが多い。何らかの話題について二人、または複数で話しているものが多く、スピーチレベルシフトには、新話題への移行、話題の終結部、談話の構成に関わる機能があると分析されてきた。しかし、上記の例のように、依頼場面や謝罪場面などの発話行為において、会話の相手への働きかけの際にスピーチレベルがシフトすることもあるのではないだろうか。

本レポートでは、このような会話者同士の働きかけの際に起こるスピーチレベルシフトの機能の分析を試みる。

2. 先行研究

2.1 日本語のスピーチレベルとスピーチレベルシフト

日本語のスピーチレベルとスピーチレベルシフトに関する代表的な研究として、生田・井出（1983）がある。生田・井出（1983）は、敬語レベルが一定の談話と、混用されている談話があるとしている。そして、敬語レベルが混用されている談話について、（1）社会的コンテクストと（2）話者の心的態度、（3）談話の展開、という3つの要因が「敬語レベル」の使い分けに関わっていると指摘している。（1）は話し手と聞き手の年齢や社会的地位や親しさのことで、（2）は相手への親しみや相手の領域を侵さない態度などを表すこと、（3）はある談話のユニットから次のユニットへの移行を明確に表示することである。

また、宇佐美（1995）は、社会人同士の初対面会話のデータを分析し、スピーチレベルシフトが生起する条件と機能について述べている。社会人初対面会話では、「敬体」使用レベルが基本レベルであるとし、「敬体不使用」レベルから、「敬体」使用レベルへのシフトが生起する条件として、以下の3つの場合を挙げている。

- (1) 「－レベル」の発話の後、「基本レベル（＋、0）」に戻る。（言語的文脈）
- (2) 新しい話題を導入するとき。（言語的文脈）
- (3) 新しい話題を導入する質問に答えるとき。（心理的文脈）

(3) は「談話機能としての標識より、むしろ、相手の発話のレベルに合わせることによって、礼儀を保っているものと思われる。」と述べている。生田・井出（1983）と宇佐美（1995）の両者に共通するのは、スピーチレベルシフトの、談話の展開標識としての機能である。

2.2 ポライトネス理論とスピーチレベル

一方、ポライトネスという観点から、スピーチレベルシフトを考える研究も多い。Brown&Levinson（1987）はネガティブフェイス（他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない欲求）とポジティブフェイス（他者に受け入れられたい・よく思われたい欲求）を侵害する言語行為をFTA（face threatening act）と呼び、フェイス・リスクを見積もる公式を以下のように立てた。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

D (Distance) は話し手 (Speaker) と聞き手 (Hearer) の社会的距離、P (Power) は聞き手の話し手 (Speaker) に対する力、 R_x (Rating[ranking] of imposition) は特定の文化内における行為 (x) の負荷度を意味する。つまり、ある行為 (x) のフェイス・リスクがどの程度高くなるかは、話し手と聞き手の、社会的距離、力関係、その行為の負荷度に

よって決まるということである。さらに、ポジティブ・ポライトネス（相手のポジティブフェイスを尊重する行為）とネガティブ・ポライトネス（相手のネガティブフェイスを尊重する行為）を実行するための様々なストラテジーの例を挙げている。例えば、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして、仲間同士の言葉の使用や冗談、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして、あいまいな言い方や敬意を表す表現の使用などを挙げている。

この考え方をを用いて、FTAを補償するストラテジーとして、スピーチレベルシフトを説明することもできる。三牧（2013）はスピーチレベルシフトの機能として、（1）対人機能（心的距離の調節）（2）談話展開標識機能（3）指標的機能（どのような立場で発話するか）の他に、（4）ポライトネス・ストラテジー機能（FTA補償／強化）を挙げている。（4）に関しては、三牧（1997）で、相手に対し、否定的評価を述べたり、非難するといった場合に、スピーチレベルシフトがFTA補償ストラテジーとして機能していると指摘している。また、FTAを補償するよりもむしろFTAを強化していると考えられる例も挙げている。

以上のように、先行研究では、初対面会話などを分析対象とし、「談話展開標識」としての機能や、相手との「心的距離を調節する」機能が指摘されてきた。しかし、実際の会話では、部屋の中で録音された数十分の初対面会話には表れない機能があるのではないだろうか。

本レポートでは、より実際のコミュニケーションの場面に近いと思われる会話資料を分析対象とし、会話者同士の発話行為の中に表れるスピーチレベルシフトに注目したい。

3. 分析する資料と方法

3.1 分析する資料

本レポートで分析する資料はテレビ番組『テラスハウス』の参加者、男女6名の会話を転記したものである。取り上げた内容は『テラスハウス』の第一話で、参加者は互いに初対面で、一人ずつシェアハウスに到着し、話しながら、互いに知り合うシーンと共同生活をしているシーンである。表1は到着した順番に参加者の性別、年齢を表している。

表1 参加者の性別・年齢

	性別	年齢
F1	女性	28歳
M1	男性	26歳
F2	女性	24歳
M2	男性	31歳
F3	女性	21歳

M3	男性	20 歳
----	----	------

3.2 参加者のスピーチレベルとスピーチレベルシフト

参加者の発話はデス・マス体で始まるが、相手の年齢が分かると、年上から年下への発話が普通体にダウンシフトする傾向がある。つまり、上下関係に配慮し、スピーチレベルを調整している。また、参加者によっては、相手が年上でも、普通体で発話している。参加者個々のダウンシフトの有無は以下のようにになっている。

表2 参加者のダウンシフトの有無

	年上に対してのダウンシフト	年下に対してのダウンシフト
M1 (26)	F1 : 有り (28) M2 : 無し (31)	F2、F3、M3 : 有り (24) (21) (20)
M2 (31)	—	F1、F2、F3、M1、M3 : 有り (28) (24) (21) (26) (20)
M3 (20)	F1、F2、F3、M1、M2 : 無し (28) (24) (21) (26) (31)	—
F1 (28)	M2 : 有り (31)	F2、F3、M1、M3 : 有り (24) (21) (26) (20)
F2 (24)	F1、M1、M2 : 有り (28) (26) (31)	F3、M3 : 有り (21) (20)
F3 (21)	F1、F2、M1、M2 : 有り (28) (24) (26) (31)	M3 : 有り (20)

男性は、M1 が2歳年上のF1に対して普通体を使っているのを除き、上下関係に基づいたスピーチレベルを維持している。一方、女性は、上下関係よりも親疎関係に配慮する傾向がある。F2は年上に対しても最初から積極的に普通体を使っている。F1も年上であるM2に対して、徐々にダウンシフトしている。また、F3も徐々に年上への発話が普通体に変化していく様子が見られた。

このように、M1とM3以外は、デス・マス体から普通体に変化する傾向が見られた。しかし、普通体に変化した後、アップシフトが起こる場面もあった。本レポートでは、このアップシフト現象に注目して、アップシフトの機能を分析したい。

3.3 スピーチレベル

本レポートでは、発話のレベルを次の4つに分ける。

表3 スピーチレベルの認定

①デス・マス体	<ul style="list-style-type: none"> ・「～です」「～ます」「～っす」及び、その活用形で文が終わるもの。 ・「～です」「～ます」「～っす」及び、その活用形に「～よ」「～ね」「～か」が後節するもの。 ・「～です」「～ます」「～っす」及び、その活用形に接続助詞が後節して文が終わるもの。 例) ～です・ますけど／～です・ますし／～です・ますから
②普通体	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞、形容詞の普通形で文が終わるもの（上昇イントネーションの質問文も含む）。 ・動詞、形容詞、名詞の普通形に「～よ」「～ね」「～んだ」「～か」が後節するもの。 ・動詞、形容詞、名詞の普通形に「～けど」が後節して文が終わるもの。 ・応答詞の「うん」
③中立体	<ul style="list-style-type: none"> ・①、②のどちらか判定できないもの。 例) 「～て。」「～のに。」「～から。」「～し。」「～んで。」

なお、「名詞・形容詞・副詞のみの発話」と「はい」は、意味機能によって次のように分類する。

・名詞・形容詞・副詞のみ

- ①質問、質問に対する答え →普通体 例) 「本当に?」「こんな感じ」
- ②相手の発話の繰り返し →中立体

・「はい」

- ①質問に対する答え →「デス・マス」体
- ②相づち →中立体

3.4 アップシフトの認定

本レポートでは、一旦ダウンシフトした後、アップシフトが起こるのはどのような場合かを分析する。アップシフトの生起はそれぞれの会話相手ごとに分析する。つまり、「特定の相手」に普通体で話した後、デス・マス体になった場合のみを見る。

【会話例2】（参加者：M1、M2、F1、F2）

174	F 2(24)：何してるんですか？	→M2	
175	M2(31)：僕はミュージシャンですね。		
176	F 2(26)：うーん		

177	F1(28) : おー		
178	M2(31) : スパイシーソルっていうバンドがあって、そのボーカルをやってるんですけど。		
179	F2(24)・F1 : へえ		
180	M2(31) : です。		
181	F2(24) : ライブとかやる…	→M2	
182	M2(31) : うん、昨日もライブで。		ダウンシフト
183	F2(24) : ふーん、[そうなんだ。		ダウンシフト
184	行ってみたいね。	→F1	
185	F1(28) : ねねねね。	→F2	ダウンシフト
186	M2(31) : ぜひぜひ。		
187	F1(28) : ギターですか？<荷物に指をさして>	→M2	
188	M2(31) : あれ、[ギターです。		

会話例2では186番まではM2の職業について話している。185でF1が普通体で話した後、187でデス・マス体で話しているが、両発話の相手が異なるため今回のレポートではアップシフトとして扱わないことにする。

4. 分析結果

アップシフトが起こった例は、合計70例あった。それらの例を観察すると、特定の発話行為でアップシフトが起こっていることが分かった。以下で、各発話について例を挙げながら、見ていきたい。

4.1 個人的な情報に関する発話 (20例) (アップシフトなし48例、合計68例)

相手の年齢や職業、知識の有無、休日の過ごし方、恋愛についての価値観など、個人的な情報に関する発話が行われる場合にアップシフトが見られた。これは相手のプライバシーに踏み込む発話であるため、話者は相手のネガティブフェイスへのFTAを実行しないようにアップシフトしていると考えられる。

【会話例3】 (参加者：M1、F1、F2)

73	F2(24) : はじめまして、F2と申します。		
74	F1(28) : [はじめまして。 hhh	→F2	
75	F2(24) : まだ3人なんだね。		ダウンシフト
76	M1(26) : [まだ3人ですね。	→F2	
77	はい。	→F2	
78	F1(28) : [そう、まだ3人。	→F2	ダウンシフト
79	いくつですか。	→F2	アップシフト

80	F2(24) : 今 24 です。		アップシフト
----	-------------------	--	--------

会話例 3 は、話をしていた F1 と M1 のところに F2 が到着した場面である。75 で F2 が、78 で F1 がダウンシフトした後、79 で、F1 が F2 に年齢を尋ねる時にアップシフトしている。

さらに、80 のように答える時にアップシフトする例も多い (20 例中 12 例)。これは、相手のスピーチレベルに合わせている (同調、宇佐美(1995)) ためとも考えられるし、自分のプライベートな話であるためとも考えられる。自分のプライベートな話を相手にすることで、相手に接近すると同時に、やはり相手の領域に踏み込むことになりうるのではないだろうか。

4.2 誘いに関する発話 (5 例) (アップシフトなし 3 例、合計 8 例)

相手を誘ったり、誘いに応じたりする発話でも、アップシフトが見られる。これは、何かを一緒にしたいかどうかという相手の内心に踏み込む発話である。

【会話例 4】 (参加者 : M1、M2、F1、F2)

218	F1(28) : 私はイラストレーターです。		
219	M2(31) : えー、[マジっすか？	→F1	
220	F1(28) : [絵を描く仕事。		
221	うん。		
222	何だと思ったの？めっちゃ…	→M2	
223	M2(31) : 何か分かんないけど。		ダウンシフト
224	実は俺も絵を描いてて。		
225	F1(28) : あっ、本当に？	→M2	ダウンシフト
226	F2(24) : えー。		
227	M1(26) : おー。		
228	M2(31) : そっちも本業にしたいというか [とか思ってたんで。		
229	F1(28) : [おー。		
230	ぜひ [ぜひ、しゃべりましょう。	→M2	アップシフト
231	M2(31) : [ちょっと相談したいっすね。	→F1	アップシフト

会話例 4 では、職業に関して話している F1 と M2 が「(職業は) 何だと思ったの？」という冗談によってダウンシフトした。しかし、その後の「本業にしたいというか、とか思ってたんで」という M2 の 228 の発話で、F1 は M2 がイラストレーターについてより詳しく話したがついてると捉え、自ら「ぜひぜひ、しゃべりましょう」とデス・マス体で誘っ

た。しかし、相手の内心に踏み込まないよう M2 のネガティブフェイスへの FTA に配慮してアップシフトしたのではないだろうか。

さらに、誘いを受ける M2 もアップシフトして答えている。個人情報に関する発話と同様、相手に同調したためとも考えられるし、相手に接近しすぎることを避けるためとも考えられる。誘いに関わる発話、全 5 例中 3 例が誘いを受ける発話である。

4.3 行動を促す発話 (8 例) (アップシフトなし 3 例、合計 11 例)

今回の会話データでは、「行きましょう」、「行きますか」、「作りますか」、「食べますか」といった相手の行動を促す発話でアップシフトが見られた。特に、年長者である F1、M1、M2 の発話で多く見られた点が興味深い。年下が促す発話を行ったのは 2 例のみであった。

相手の行動を促す発話は、相手を持っている意思を変えたり、急かしたりする行為であるため、相手の上に立つ行為であると考えられる。したがって、自分の立場を下げようとして、デス・マス体を用いていると考えられる。

【会話例 5】 (参加者： F1、F2、F3)

488	F2 (24) : あ [あ。		
489	F1 (28) : [外がある。		ダウンシフト
490	F2 (24) : また、ご飯食べられるところがあるじゃん。		
491	F3 (21) : ねえ、ステキすぎ。		ダウンシフト
492	F2 (24) : ここ、なんかよくない？		
493	やね、屋根裏みたい。		
494	F1 (28) : 確か [に。		
495	F3 (21) : [確かに。		
496	F1 (28) : じゃあ、上行こうか。	→F3※	
497	F3 (21) : 上、[行きましょう。	→F1	アップシフト
498	F1 (28) : [上、行きましょう。	→F3	アップシフト

※F2 は一人で離れて座って別の方向を向いている。F1 と F3 は立っている。

496 まで F1 も F3 も普通体を用いていたが、発話 496 で F1 が「じゃあ、上行こうか」と目上の立場で F3 を促すと、F3 がその促しを受け、「上、行きましょう」とアップシフトして答えた。さらに、F1 がもう一度「上、行きましょう」と発話形式をデス・マス体にアップシフトして促している。

4.4 ほめに関する発話 (5 例) (アップシフトなし 4 例、9 例)

相手をほめる発話やほめを受け入れる発話でも、アップシフトが見られた。ほめることは相手进行评估することであり、自分に評価する能力があるということを表す。また、ほめられた側は相手に能力を認められたことによって立場が上がる。そのため、ほめる側は、自分を下げたため、ほめられる側は謙遜を示すためにアップシフトをしていると考えられる。

【会話例 6】（参加者：M1、M2、F1）

738	M1 (26) : かつこいい。		ダウンシフト
739	F1 (28) : それは超、人。		ダウンシフト
740	M1 (26) : 超細かいね。	→F1	
741	F1 (28) : それは、細かい。		
742	M1 (26) : 上手っすね。	→F1	アップシフト
743	F1 (28) : ありがとうございます。	→M1	アップシフト
744	M1 (26) : すいません。	→F1	
745	なんか偉そうに。	→F1	
746	F1 (28) : ううん。	→M1	ダウンシフト
747	ありがとうございます。	→M1	アップシフト

会話例 6 は F1 の描いたイラストを見ながら話している場面である。742 で、M1 が F1 のイラストをほめる際に、「上手っすね。」とアップシフトしている。M1 はほめることで、相手进行评估することになり、立場が上がることを避けるためにアップシフトしたのではないだろうか。このことは、その後で「すいません。なんか偉そうに。」と謝罪していることから分かる。

一方、ほめられた F1 もアップシフトしてほめを受けた。M1 のほめを受け入れることで、立場が上がることを避けるためにアップシフトしているのではないだろうか。

4.5 謝罪に関する発話 (1 例) (アップシフトなし 0 例、合計 1 例)

謝罪する発話や、謝罪を受け入れる発話においてもアップシフトが見られる。謝罪は、相手に失礼なことをした後に行う発話なので、自分の立場を下げるために、アップシフトをすると考えられる。その結果、謝罪する側が下、謝罪を受ける側が上という上下関係ができてしまう。謝罪を受け入れる発話では、謝罪場面でできた上下関係をなくすために、アップシフトが行われると考えられる。

【会話例 1 (再掲)】 (参加者：M1、M3、F1)

725	F1 (28) : 「FUDGE」って雑誌わかりますか？		アップシフト
726	メンズもあるかな？		ダウンシフト
727	M1 (26) : 「men' s FUDGE」ってあったよね。		

728	F1 (28) : そう。		
729	[そのの…、メンズと		
730	M1 (26) : [「何 FUDGE」って。hhh		
731	M3 (20) : これっすか。	→F1	
732	F1 (28) : そう。		
733	<M3 が F1 (28) の携帯電話を取り落として> M3 (20) : あ、ごめんなさい。	→F1	
734	F1 (28) : 全然です。	→M3	アップシフト

この場面で、F1 は M1 と M3 に自分の携帯電話のケースに描かれている自分の作品を見せている。携帯電話を受け取った M3 がその携帯電話を取り落とし、「あ、ごめんなさい。」と謝った。732 に見られるように、F1 はここまで普通体で話していたが、733 で M3 に謝罪され、734 で「全然です。」とアップシフトしている。

4.6 感謝を伝える発話 (3 例) (アップシフトなし 2 例、合計 5 例)

感謝を伝える発話は、相手から恩恵を受けた後に行われる発話である。そのため、自分の立場を下げるために、アップシフトをすると考えられる。

【会話例 7】 (参加者 : M1、M3、F1)

692	M1 (26) : お土産です。		
693	F1 (28) : イエーイ。		
694	えっ、すごいっぱいある。		ダウンシフト
695	台湾ビールだ。		
696	M3 (20) : あ、台湾。		
697	F1 (28) : ありがとうございます。	→ M1	アップシフト
698	わーい。		

会話例 7 は M1 が台湾から持ってきたビールをお土産として渡す場面である。ここで f1 は「ありがとうございます。」とアップシフトしてお礼を言っている。

なお、F1 の発話には、ほめに対する反応としての「ありがとうございます。」も他に 2 回あるが、それは、「ほめに関する発話」で数えている。

4.7 定型表現 (9 例) (アップシフトなし 2 例、合計 11 例)

「お願いします」「おやすみなさい」「お邪魔します」「お邪魔しました」といった表現は、「おかえり」の 2 例を除き、毎回アップシフトが見られた。「お願いします」は、依頼ではなく、申し出に対する了承として用いられている。また、「お邪魔します」「お邪魔しました」は、相手の領域に立ち入る際のあいさつである。「定型表現」はあいさつ

や、社会的なマナーとして定着している発話であるため、普通体にシフトしにくいと考えられる。まだ親疎の関係が確定していない場面で普通体を用いると、配慮不足と感じて、FTA と見なされ得るのではないだろうか。それを避けるために、あえてアップシフトして、社会的なマナーをわきまえていることを表していると考えられる。

なお「ただいま」は、「ただいま戻りました」の普通体とも考えられるが、「ただいま戻りました」はそれほど一般的ではない表現であると考え、今回の分析ではアップシフトなしの例には含めなかった。

【会話例 8】（参加者：全員）

642	M2(31)：調味料もなんもないから、		
643	F1(28)：[うん。		
644	F2(24)：[あ、そうだ。		
645	醤油、色々。		
646	M2(31)：雑に買ってきていい？		
647	F1(28)：お願いします。	→M2	アップシフト
648	M1(26)：お任せします。	→M2	
649	M2(31)：わかった。		

F1、F2、F3、M2 は既に普通体で会話をしていたが、647 で買い物を申し出た M2 の発話に対して、F1 が「お願いします」と答えている。これは、相手の申し出を受け入れる場面で、配慮を表すために、アップシフトしていると考えられる。

5. 分析結果のまとめと考察

5.1 アップシフトの機能

今回の分析の結果、アップシフトが起こる発話として、「個人的な情報に関する発話」「誘いに関する発話」「ほめに関する発話」「謝罪に関する発話」「感謝を伝える発話」「行動を促す発話」「定型表現」という、具体的な話題が特定できた。

先行研究では、アップシフトの機能として、新話題への移行や話題の終結部などの談話の展開標識や、心的距離の調整などが指摘されてきた。今回の分析でも、例えば、会話例 3（個人的な情報に関する発話）は新話題への移行、会話例 4（誘いに関する発話）は話題の終結部とも言える。しかし、新話題への移行や話題の終結部は頻繁にあるもので、シフトが起こる場合が多いわけではない。また、新話題への移行や話題の終結部ではない場合にもアップシフトが起こっている。また、「ほめに関する発話」や「謝罪に関する発話」など、心的距離の調整でも説明できない例が多くみられた。

「個人的な情報に関する発話」、「誘いに関する発話」ではアップシフトすることによって親疎関係を調節している。相手の個人的なことを聞いたり、相手を誘ったりすることは、相手に近づくことである。それは、相手の領域や気持ちに踏み込む FTA になるため、それを回避するために、アップシフトして、距離を取ろうとするのではないだろうか。先行研究でも、心的距離の調節は指摘されていたが、より具体的に、個人情報に関する話題や誘いという発話行為の際にアップシフトが現れることがわかった。

「行動を促す発話」、「ほめに関する発話」、「謝罪に関する発話」、「感謝を伝える発話」ではアップシフトすることによって、上下関係を調節している。促しや、相手をほめる場合、ほめをうける場合、謝罪を受ける場合、立場が上がることになる。そのことを表すと FTA となりうるため、アップシフトして FTA を回避する。また、謝罪は、相手に失礼なことをした結果、感謝は相手から恩恵を受けた結果の発話行為であるため、自分の立場を下げるために、アップシフトをする。

5.2 アップシフトの起こりやすさ

表 4 アップシフトの出現の有無

発話行為	アップシフト あり	アップシフト なし
個人情報に関する発話	20	48
誘い	5	3
促し	8	3
ほめ	5	4
感謝	3	2
謝罪	1	0
定型表現	9	2
合計	51	62

アップシフトの出現率を見ると、親疎関係を調節するグループ（「個人的な情報に関する発話」、「誘いに関する発話」）、上下関係を調節するグループ（「行動を促す発話」、「ほめに関する発話」、「謝罪に関する発話」、「感謝を伝える発話」）、「定型表現」の順に出現率が高くなっていた。

上下関係を調節するグループは、親疎関係を調節するグループと比べて、習慣的、自動的に行われるものであると考えられる。このような発話行為において、上の立場に立たないようにすることが、一般的なマナーとして身につけているためではないだろうか。

また、「定型表現」はあいさつなど、形式が変わりにくい発話で、改まった場面にふさわしい言語形式を用いることで、社会的常識を理解していることを示していると考えられる。そのため、初対面の相手と話す場合、普通体にシフトしにくく、上下関係を調節する

グループよりさらに言語形式が固定していると考えられる。「初めまして」「ただいま」など、通常「デス・マス体」「普通体」の片方の形式しか持たない言語表現が存在することからもこのことが分かる。

5.3 今後の課題

アップシフトが起こった例はいずれも、複数人数で行われた発話の中で特定の一人に対して、質問、誘い、謝罪などの発話を行っている例でもある。したがって、アップシフトには特定の相手を限定する機能を持っていると言えるのではないだろうか。この点に関して、今後さらに分析を続けたい。

また、今回発話行為として分析した 51 例以外にも、アップシフトが見られた発話が 19 例あった。それらの例についても、分析を行いたい。

参考文献

生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『言語』12 巻 12 号, pp. 77-84

伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語化学』6 巻 2 号, pp. 12-26

宇佐美まゆみ（1995）「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語化学』第 1 巻第 1 号, pp. 7-22

三牧陽子（1997）「対談における FTA 補償ストラテジー —待遇レベル・シフトを中心に—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号, pp. 59-76

三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版

Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社]